



伊藤若冲《月夜白梅図》

Topics

伊藤若冲 —アナザーワールド—

江戸みやげ

## 伊藤若沖のアナザーワールド

千葉市美術館は、昨年秋以来の館内工事が終了し、本年3月にリニューアルオープンしました。毎年恒例の千葉市民美術展覧会に間に合い無事開催されたことに、ほっと安堵したものでした。

4月からの新年度は、「近代日本美術の百花」と題して、当館が誇る明治以降の絵画と版画のコレクションから選り抜きの逸品を並べ、文字通り百花繚乱の華やかな会場で幕を開いたものでした。久しぶりのコレクション展でしたが、来館の皆様には大変ご満足をいただいたようで、多くの方々がアンケートで喜びや励ましの声を届けてくださいました。ありがたく、館員とともに感激したものでした。

5月22日からは、再開後、初の特別展、「伊藤若沖—アナザーワールド」が始まります（～6月27日）。すでに共同企画の静岡県立美術館で好評裏に終了したもので、首都圏の若沖ファンには待望のお目見えとなります。昨今の若沖ブームを追い風として、さらにより一層の理解を深めようと、これまで未紹介の作品を含めて沢山の若沖画が、会場狭しと並ぶ予定です。どうぞお見逃しのないように。

芸術家のタイプには、大きく分けてふた通りあるように思われます。一つは個性的な作風を独創してそれを生涯守り洗練させるタイプ、もう一つは、自己の様式（スタイル）や作域（レパートリー）を絶えず進化させ絶え間なく変貌するタイプです。前者の典型がルノワールや喜多川歌麿、東郷青児だとすれば、ピカソや葛飾北斎、そして伊藤若沖が後者を代表する例といえるでしょう。

伊藤若沖（1716-1800）は、江戸時代中期の京都に商家の長男として生まれました。家業の青物問屋を中年で弟に譲り、後半生を画業に専念したものでした。数え年で85歳まで長寿を保ったものですから、本格的な作品を約50年にもわたって描き残していますが、それらは形式や内容においてめまぐるしいほど変化に富んでいます。代表作としては、生前に相国寺に寄進し、明治に入って寺から皇室に献納された「動植綵絵」30幅がありますが、そうした絢爛として精細な着色画のみが若沖の絵画世界ではありませんでした。水墨の表現では、“筋目描き”といわれるような、墨の面と面の間に白い筋目が残る効果を利用して、鳥の羽や魚の鱗、花の花卉や葉の重なりを微妙に表したり、陰刻した木版に墨を塗りその上に和紙を貼って拓本をとるようになる“拓版画”を試みています。明和年間（1764-1772）のその頃には、江戸の浮世絵から錦絵という華やかな色摺りの版画が生まれていますが、京都の若沖はそれとは違った、ネガティブな（陰画的な）モノクロームの版画で対抗してみせたのでした。さらには、屏風の大画面に1センチほどの柘目を一面に作り、その中に複数の小さな色面を塗り重ねてモザイク調の絵を作る“柘目描き”という、ユニークな描法も独創しているのです。今回

の展覧会に副題として付けられた「アナザーワールド」という言葉は、ほかの画家とは違う世界であると同時にまた、若沖自身においても様々な絵画ワールドが追求され、拓かれていたことを意味しているようです。

若沖展の後にも、世界の仮面を集めた「MASKS—<sup>かり</sup>一<sup>おもて</sup>仮の面」（7月6日～8月15日）、千葉にゆかりの、そして奄美大島で変身、開花した異色画家田中一村の実像を取り上げる「田中一村 新たなる全貌」（8月21日～9月26日）をはじめ、満を持して用意した特別展が目白押しに続きます。学芸員を初めとして館員一同が練りに練って企画、運営に当たった渾身のラインアップです。どうぞご期待下さい。

[館長 小林 忠]



伊藤若沖《寿老人・孔雀・菊図》(部分) 千葉市美術館

Ito Jakuchu Another World

# 伊藤 若冲

## アナザーワールド

### ♥アナザーワールド

伊藤若冲(1716-1800)の代表作といえはなんといっても《動植綵絵》(宮内庁三の丸尚蔵館)です。残念ながら今回の展覧会には《動植綵絵》は出品されませんが、例えば《月夜白梅図》(図1)は精緻な描写と美しい彩色を兼ね備えた作品で、画面の大きさからいっても《動植綵絵》と近いものです。アナザーワールドとは水墨画の世界、《動植綵絵》のようなカラフルな作品に対するモノクロームの世界を指しています。本展覧会は伊藤若冲の水墨画を主に取り上げることから、アナザーワールドと名乗ることになりました。

しかし着色作品であろうと水墨作品であろうと、若冲は作品の中に現実とは異なる別世界を作り上げています。《樹花鳥獸図屏風》(図2)に描き出された、花が咲き乱れ鳥獸が群れ集う楽園もまたアナザーワールドなのです。



図1 《月夜白梅図》

### ♥《蓮池図》

海中の鯨と水辺の象が対面する《象と鯨図屏風》(図3)も不思議で魅惑的な世界ですが、西福寺の《蓮池図》(図4)はいっそう強く異世界を感じさせます。もともと《蓮池図》と《仙人掌群鶏図》は襖の両面に描かれました。金地に極彩色で得意の鶏を描いた《仙人掌群鶏図》は本堂の外陣側、墨で蓮を描いた《蓮池図》は内陣側を飾って



図2 《樹花鳥獸図屏風》 静岡県立美術館



図3 《象と鯨図屏風》 MIHO MUSEUM

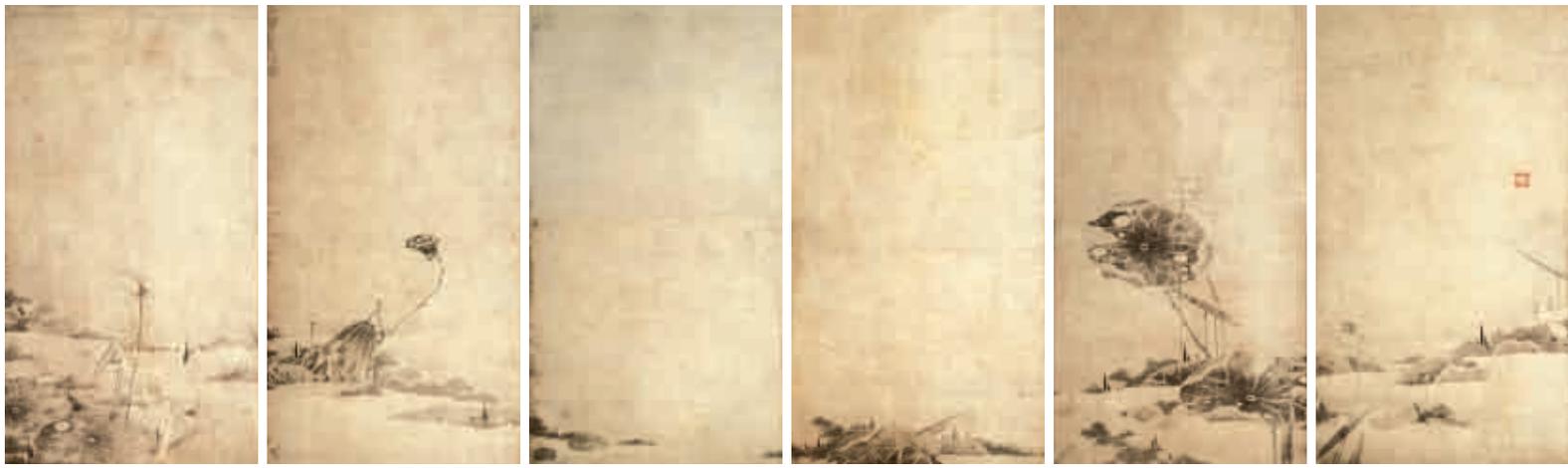


図4《蓮池図》大阪・西福寺 重要文化財

ました。俗世側の《仙人掌群鶏図》に対して《蓮池図》は彼岸に続きます。蓮は釈迦の誕生を告げて花を開いたといい、極楽浄土には蓮池が広がります。《蓮池図》には仏教との結びつきを踏まえて蓮が描かれています。若冲は若いころから相国寺の禅僧大典(梅莊頭常)と親しく、後には黄檗宗の僧として名前をもらうほど仏教を深く信仰していました。

若冲は天明9年(1789)の制作と思われる《蓮池図》以前にもたびたび蓮を描いています。《蓮・牡丹図》(図5)は水気をたっぷり含んだ墨の筆跡を生かした、荒々しさを感じさせる描法で描かれています。《蓮池図》と画面からうける印象がかなり異なりますが、かたちに共通点があります。端がめくれ上がって所々に穴が開く大きな上向きの蓮の葉と枯れて下向きに閉じた蓮の葉は、より静かで整ったかたちとして、穴と斑点を増やして宝暦10年(1760)《花鳥蔬菜図押絵貼屏風》の一幅(図6)に表れます。《動植綵絵》の《蓮池遊魚図》にもよく似た蓮の葉の組み合わせが見られます。明和4年(1767)刊『素絢石冊』にも下向きの葉と花が表れます。《蓮池図》には花が落ち、実をつけた花托も見えます。食用になる蓮の実と花托は若冲が野菜類を描いた作品、《菜蟲譜》(佐野市立吉澤記念美術館)と《蔬菜図押絵貼屏風》(図7)に蓮根と一緒に描かれます。また《果蔬涅槃図》(京都国立博物館)には花托、蓮根とともに下向きの蓮の葉も見られます。明和元年(1764)の金刀比羅宮奥書院上段之間の《花丸図》でも蓮は四箇所に表れ、花、下向きの葉、上向きの葉、花托が描かれています。現在信行寺天井画として残る、最晩年の旧石峰寺観音堂天井画《花卉図》にも蓮が含まれ、下向きの葉のかたちが認められます。蓮は仏教との結びつき、かたちの面白さ、青物問屋に生まれて馴染んだ野菜、といろんな意味で若冲が好んだ題材といえそうです。

《蓮池図》の水墨表現はなかなか特異なものです。薄く墨を刷り、塗り残しの白い部分を効果的に用いるところは、黒と白の割合は異なるものの『乗興舟』(図8)のような正面摺の手法と近いところがあります。平賀蕉斎は同様の表現で同じ画題を描いた水墨面に「石摺(正面摺)」的な表現を認めて、若冲を訪問したときの記事に「ふすまに石摺のように蓮を書けり」と記しました。若冲は初期の作品、《葡萄図》(プライス・コレクション)や《隠元豆・玉蜀黍図》



図5《蓮・牡丹図》



図6《花鳥蔬菜図押絵貼屏風》(部分)



図7《蔬菜図押絵貼屏風》(部分)



図8 《乗興舟》千葉市美術館

(図9)でも、《蓮池図》のような、筆跡を抑えて、墨を線、面の要素として使う硬質な水墨表現をとっていました。同様の水墨表現は、水墨と着色が入り混じった《百合図》にも見られましたが、その後はしばらく用いられなかったようです。硬質な表現は平面分割的な要素と結びついて着色画で追及されたためかもしれません。《蓮池図》は部分的に硬質な水墨表現を見せつつも、平面分割的な要素は弱く、緩やかにまとまる構図となっています。

《蓮池図》と同じ年に描かれた《群鶏図障壁画》(旧海宝寺障壁画、京都国立博物館)には、《仙人掌群鶏図》と形態が一致する鶏が水墨で描かれています。背地に薄く墨を刷くところは《蓮池図》とも近く、《蓮池図》の水草の表し方と《群鶏図障壁画》旧壁貼付部分の地面の草の描き方もよく似ています。《群鶏図障壁画》には《仙人掌群鶏図》《蓮池図》の両面の要素が含まれます。旧壁貼付部分には鬮體のような岩が描かれていて、この作品もまた若冲のアナザーワールドを感じさせます。



図9 《隠元豆・玉蜀黍図》和歌山・草堂禅寺

## ♥若冲からの招待状

若冲は自分の絵が世に残るように《動植綵絵》を相国寺に寄進しました。後世の人が自分の作り上げた作品世界に遊ぶことを望んでいたのです。今に伝えられた作品はいわば若冲からのアナザーワールドへの招待状です。その招待に応じて、水墨画を中心とした、若冲のアナザーワールドをお楽しみください。

[学芸員 伊藤紫織]

### ■ 記念講演会

2010年6月5日(土) 14:00~

「伊藤若冲の魅力」

講師：辻惟雄(MIHO MUSEUM館長)

会場：千葉市美術館11階講堂 / 先着順150人 / 参加無料

### ■ 講演会

2010年6月20日(日) 14:00~

「伊藤若冲の多彩な絵画ワールド」

講師：小林忠(当館館長)

会場：千葉市美術館11階講堂 / 先着順150人 / 参加無料

### ■ 市民美術講座

2010年6月19日(土) 14:00~

「伊藤若冲と唐画」

講師：伊藤紫織(当館学芸員)

会場：千葉市美術館11階講堂 / 先着順150人 / 参加無料

### ■ 学芸員ギャラリートーク

5月26日(水) 午後2時~

### ■ ボランティアによるギャラリートーク

会期中の毎週水曜日 14:00~(5月26日を除く)

## 伊藤若冲 —アナザーワールド—

2010年5月22日(土)▷6月27日(日)

6月7日(月)に大規模な展示替を行います

10:00—18:00(金・土曜日は20:00まで)

\*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 6月7日(月)

[観覧料] 一般 1,000(800)円

高校・大学生 700(560)円

小・中学生 無料

\* ( )内は前売、団体30人以上および市内在住60歳以上の料金

\* 前売券は、千葉市美術館ミュージアムショップ(5月9日まで)、千葉都市モノレール

「千葉駅」「千葉みなと駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(6月27日まで)にて販売

\* リピーター割引あり(有料で入場された方は2回目以降半額でご観覧いただけます。)

# 江戸みやげ

## 所蔵浮世絵名品選



鳥居清長《美南見十二候 六月（座敷の遊宴）》天明4（1784）年頃



喜多川歌麿《谷風と金太郎の首引き》寛政5（1793）年頃



葛飾北斎《富嶽三十六景 神奈川沖浪裏》天保2-4（1831-33）年頃

「浮世絵」と聞けば目に浮かぶ、カラフルで精緻な多色摺版画。何枚もの版木を使って墨線と色の面とをびたりと摺りあわせるこの手法は、明和2（1765）年、江戸の好事家たちが趣向を競った絵暦交換会に始まります。以来まもなく250年。江戸の大衆を魅了した浮世絵の人気は今なお高く、当館でも数々の展覧会を重ね、好評をいただいています。



鈴木春信《琴を弾く美人》明和4（1767）年頃

「伊藤若冲—アナザーワールド」とともにご覧いただく所蔵作品展は、「江戸みやげ」と題し、当館自慢の版画や版本から構成いたします。絵師と彫師、摺師の高度な分業による浮世絵版画は、文化といえは上方発と相場が決まっていた当時であって、ほかならぬ江戸の地で誕生し、「吾妻（＝東）錦絵」と誇らかに呼ばれました。錦織物にたとえられるほどの華やかさ・まばゆさはたちまち人々の心をつかみ、花形役者や人気の花魁の姿を伝えながら、市中だけでなく、江戸一番の名物として地方へも浸透してゆきます。「江戸みやげ」というタイトルには、錦絵が最新のニュースソースや未知の世界への窓として機能し、求められていた頃の活気に迫りたいという思いを込めました。ご存じのとおり錦絵は、庶民が心安く手にとって楽しんだもの。作品の保存上、やむをえず額縁やケースに入れて展示いたしますが、版行当時の瑞々しさや、買い求めた人々の心の弾みを想像しながらご覧いただければ、と思います。

展示の前半では、江戸の錦絵がいかんして生まれ、どのように展開したのかを駆け足でたどります。菱川師宣の墨摺絵を導入部に、奥村政信や鳥居清長の紅摺絵を経て、鈴木春信の登場により一気に開花する絢爛豪華な多色摺。春信の作品ははじめ粋人たちの配り物として使われましたが、めざとい版元たちが版木を譲り受けて商品化、「吾妻錦絵」と謳われたそれらは熱狂的に迎えられ、またたく間に時の印刷界を席卷しました。以後江戸の「今」を活写しながら画題や構図のヴァリエーションを増やし、彫摺の技を成熟させてゆくさまを、鳥居清長ののびやかな美人群像、喜多川歌麿の艶っぽい美人大首絵、東洲斎写楽の鮮烈な役者絵、葛飾北斎の奇想あふれる風景などからご覧いただけます。

展示の後半には、特に江戸の名所や名物を描いた作品を集めます。展示されるのは菱川師宣の『江戸雀』や葛飾北斎の『東遊』といった江戸名所を写した版本、歌川国貞のシリーズ『江戸自慢』や歌川国芳のシリーズ『東都名所』など。錦絵は、その洗練された美しさと携帯性から、恰好の江戸みやげとして喜ばれました。空前の旅ブー



菱川師宣『江戸雀』より 延宝5年(1677)



歌川国芳《東都名所霞ヶ間》 天保(1830-44)前期

ムを背景に、全国津々浦々へと伝えられた両国や浅草の繁華、あるいは江戸前の美味—。ささやかな摺物に寄せられた人々の誇りや憧れを、どうぞ追体験してください。

錦絵は、もっと華やかなものを、もっと斬新なものを、という大衆の目の欲望を満たしながら、江戸の遊びと不可分に発展してきました。鮮やかな画像の氾濫する現在では想像すら難しいけれども、約60点の作品から、絵草紙屋の店先の賑わいや、遠い地から江戸に思いをはせる気分を感じていただけたら幸いです。

[学芸員 西山純子]

## 江戸みやげ —所蔵浮世絵名品選—

2010年5月22日(土)▷6月27日(日)

10:00—18:00(金・土曜日は20:00まで)

\*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 6月7日(月)

[観覧料]	一般	200(160)円
	高校・大学生	150(120)円
	小・中学生	無料

\* ( )内は前売、団体30人以上の料金

\* 千葉市内在住60歳以上の方は無料

\* 同時開催の企画展「伊藤若冲—アナザーワールド—」をご覧の方は無料

## ボランティア日和 episode23

「美術館にきたけれど帰りの道が不安なんです」。ギャラリートークを終えて帰ろうとした私にお客様から声がかかりました。「それなら一緒に」と駅までご案内しました。「歩ける距離だったのね。近いと感じたわ。また来ますね」と笑顔でこたえてくださいました。

ボランティア活動で「美術館への道を考える」というチームができたのは2006年のこと。誰かがやってくれるという思いもあり一歩踏み出せずにいました。迷わず美術館に来ていただくためのわかりやすい地図があったら、という思いが強くなったのは、お客様から頂いた「ありがとう」のひとつでした。

昨年6月に再結成したチーム「道」には、千葉大学の学生さんも加わって下さり会合を重ねました。若い方たちの新鮮な発想に触発される楽しい日々でした。そして今年の4月に地図が完成。5月には地図の裏面に「ボランティアのお勧めランチマップ」を紹介することができました。マップは美術館の受付やHPでご覧いただけます。どうぞ意見をお聞かせください。

ここ4、5年の私の趣味は美術館巡りの旅をすること。週一度くらいのペースで続けています。作品を見ることが一番の目的ですが、他館のボランティア活動やワークショップ、バス時刻や道の案内方法など、興味は尽きず資料を集めています。先日訪れた美術館では、受付の横に「帰りのご案内をします」の地図とともにボランティアが座っておられました。地図を渡されただけでは完全ではないと話し

合ったばかりなので、他館の行き届いた試みは参考になります。

最後にチーム「道」から生まれた活動をもう一つご紹介します。「駅でお迎えして美術館までご案内するのってどうですか」。大学生さんの一言が『美ナビ』プロジェクトを生みました。ボランティアが美術館までナビゲートする企画です。「伊藤若冲—アナザーワールド」展から始まります。わくわくドキドキしながらみなさまをお待ちしています。美術館でギャラリートークをし、子供たちと作品に向かう鑑賞リーダーの仕事がボランティア活動の柱。今回は活動のアナザーワールドについてご紹介しました。

5月からボランティア3期生の募集が始まりました。大好きな美術館で、人と美術館をともに紡いでいきませんか？

[美術館ボランティア 志村眞澄]



チーム「道」作成による「わかりやすい千葉市美術館への道 駅→美術館編」

## ◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

今年度上期は右記の内容で行います。聴講は無料ですのでお気軽にご参加下さい。

〔時 間〕 14：00より(開場は30分前)

〔場 所〕 11階講堂

〔定 員〕 先着150名(入場無料)

- 第1回 5月29日(土) 「池大雅と文人画」  
〔講師〕 小林忠(当館館長)
- 第2回 6月19日(土) 「伊藤若冲と唐画」  
〔講師〕 伊藤紫織(当館学芸員)
- 第3回 7月24日(土) 「勅使河原蒼風とモダニズム」  
〔講師〕 藁科英也(当館学芸係長)
- 第4回 8月14日(土) 「バーナード・リーチと日本の銅版画家たち」  
〔講師〕 西山純子(当館学芸員)
- 第5回 9月11日(土) 「田中一村と千葉」  
〔講師〕 松尾知子(当館学芸員)

## ミュージアムショップ通信

●ミュージアムショップから、ショップを運営しております便利堂の新商品をご紹介します！

### ○伊藤若冲のぼち袋

「玄圃瑶華」をぼち袋にしました。12種類の図柄を3枚ずつ組み合わせています。シルクスクリーンで



プリントした図柄は、モノクロではなく銀色を使用し、モダンな印象を演出しています。ひとことメッセージを入れる封筒としてもお使いいただけます。他にも、高い技術が必要とするコロタイプで制作された若冲の絵のはがきや、「菜蟲譜」絵のはがきセットも登場いたします。どうぞお楽しみに！

### ○染型撰のはがきはがき

江戸から大正にかけて使われていた染の型紙をモチーフにして、季節ごとのはがきを制作しております。今年は、表面が盛り上がる発



泡印刷を施し、風合いも楽しめるはがきに仕上がりました。「はる」に続いて第二弾の「なつ」は涼しげな色を配し、暑中お見舞いのお便りはもちろん、飾っても涼を呼ぶひと品です。染型撰シリーズは他にも便箋・封筒・通年で使えるはがきも新柄が登場しました。お気に入りのひとつが見つかることと思います。

ミュージアムショップのみのご利用も出来ますので、皆様のお越しをお待ち申し上げております。



### 〔交通案内〕

- JR千葉駅東口より
- 徒歩約15分
- 千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分
- バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩3分
- 京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- 東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
- 地下に駐車場があります

 **千葉市美術館**  
Chiba City Museum of Art

<http://www.ccma-net.jp>

### 〔編集・発行〕

千葉市美術館  
〒260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8  
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316  
Chiba City Museum of Art  
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan  
〔発行日〕 2010年5月22日  
〔印刷〕 半七写真印刷工業株式会社

